

検証・浦和電車区事件の真実 No.4

民主化闘争情報 [号外] 2008 年 4 月 7 日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第4回 集団的吊し上げの始まり

Y氏(当該事件被害者)は、上原分会長(被告)ら浦和電車区分会の役員に許してもらうためには、もはや、一緒にキャンプに行った仲間の名前を明かすしかないと考え、2000年12月29日、メンバーそれぞれに電話で相談した。電話を受けたJR東労組組合員のF氏は、事態を治めるにはどうすべきか、東京車掌区のY氏の先輩で以前から交遊があり、JRグリーンユニオン(JR連合)に所属するG氏に相談することにした。

「作り話」で事を治めよう...

相談を受けたG氏は、この事態を乗り切るために「キャンプは東労組を脱退したH氏(グリーンユニオンに加入)を東労組に戻すために設定した」「キャンプ場に行くまで、Y氏はH氏の参加を知らされていなかった」という作り話で口裏を合わせ、東労組に説明することとなった。Y氏はこの話を聞き、ただキャンプに行っただけなのに、なぜ嘘をつかなければならないのか釈然としなかった。それでも、他の参加者が厳しく追及されることになっては迷惑が掛かると思い、G氏に言われた通り、作り話で対応することを決意した。

「拡大闘争委員会」で4時間吊し上げ

翌日の12月30日もY氏の仕事は休みだったが、分会長の指示通り、13時頃に浦和電車区講習室に行った。そこでは「拡大闘争委員会」なる集会が開かれ、すでに30人ほどが集まっていた。その場でY氏は「裏切り者!」などと激しく罵声を浴び、キャンプ参加者の名前を言うよう責められ続けた。Y氏は仕方なく彼らの名前を明らかにした。それでも追及は止むことなく、組合活動に不熱心な姿勢を厳しく糾弾され、謝罪を要求された。最後には、組合に進んで協力すること、前職場である東京車掌区のメンバーらと縁を切ることなどを約束させられた。

集会は17時頃まで、実に、約4時間も続き、Y氏はその時間中、参加者から间断なく繰り返し罵声を浴びせ掛けられた。まさに吊し上げの状態だった。組合が個人的な付き合いにまで干渉することには納得できなかった。それでも、延々と続く集団的な糾弾から解放されたい一心から、仕方なく理不尽な約束を受け入れたことで、ようやく集会は終了した。

なお、この集会には、上原分会長のほか、大濶被告、小黑被告らが出席していた。

しかし、Y氏に対するJR東労組の追及行動は、治まるどころか、年が明け、2001年になってから、ますますエスカレートしていくのである。(次号に続く)

浦和電車区事件被告7名のJR東労組での当時の組合役職

梁次邦夫被告：大宮地本副委員長、山田知被告：同地本青年部事務長、上原潤一被告：浦和電車区分会長、齋藤秀一・小黑加久則被告：同分会執行委員、八ツ田富男被告：同分会運転士分科会常任委員、大濶慶逸被告：同分会組合員(元執行委員)

「検証・浦和電車区事件の真実」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>